

『本草綱目』の日本版 Japan Edition of the Bencao Gangmu

真柳 誠 (日本茨城大学)

かつて『本草綱目』の明版・清版は世界各国に伝えられ、とりわけ漢字圏の日本・朝鮮・ベトナムでの本草研究に多大な影響を与えてきた。ただし本書の朝鮮版・ベトナム版はなく、外国で全巻を復刻したのは現在に到るも日本しかない。

本書が日本に渡来した初記録は、これまで江戸初期の慶長 12 年 (1607) とされてきた。しかし徳川家康に仕えた儒者の林羅山が、慶長 9 年 (1604) 以前に本書を実見した記録があるので、1604 年以前の渡来と訂正されねばならない。

本書の日本版については牧野富太郎・白井光太郎・渡邊幸三・岡西為人の研究があり、それらに私見を補足すると以下の 6 版 17 種に大別できる。

1 寛永版系 (6 種)

①寛永 14 年 (1637) に野田弥次右衛門が万暦間の石渠閣重訂江西版を復刻。題簽は「〔江西〕本草綱目」。②承応 2 年 (1653) に野田弥次右衛門が封面と本草図を崇禎 13 年 (1640) 武林錢衙版で復刻、その他は①を重印。題簽は「〔江西〕本草綱目」。③無名氏が②版木の刊記を削去して未詳年に重印。題簽は「〔新刻〕本草綱目」。④無名氏が③版木の訓点を削改して未詳年に重印。題簽は「〔新刻〕本草綱目」。⑤無名氏が④書版を未詳年に重印。題簽は「〔大字／正誤〕本草綱目」。⑥正徳 4 年 (1714) に唐本屋八郎兵衛が稻生若水の校訂により⑤版木を削改、封面を新作して重印 (和刻最善本)。題簽は「本草綱目〔新校正〕」。

2 万治版系 (3 種)

⑦万治 2 年 (1659) に茂斎が武林錢衙版を復刻。⑧寛文 9 年 (1669) に松下見林の校訂により⑦版木の訓点を削改して重印。⑨無名氏が⑧版木を校改して未詳年に重印。

3 寛文版系 (5 種)

⑩寛文 12 年 (1672) に無名氏が武林錢衙版を復刻し、貝原益軒の「本草綱目品目」「本草名物附録」を附刻。⑪題簽のみ「〔和名入〕本草綱目」に作り⑩版木を未詳年に重印。⑫題簽のみ「〔校正〕本草綱目」に作り⑪版木を未詳年に重印。⑬題簽のみ「〔和名入〕本草綱目〔校正〕」に作り⑫版木を未詳年に重印。⑭題簽のみ「〔増補〕本草綱目〔校正〕」に作り⑬版木を未詳年に重印。

4 近代活字版

近代活字版（3 版 3 種）は⑮『補註本草綱目』3 冊（1915-19）、⑯日本語訳『頭註国訳本草綱目』15 冊（1929-34）、⑯に増注した⑰『新註校定国訳本草綱目』17 冊（1973-79）が出版されている。